

事例33 単元「古代ギリシア史」

ギリシア哲学の内容と発展について考えてみよう

地歴 世界史B 第2学年

石川県立小松高等学校・教諭

1 事例の概要

世界史で学ぶ知識は、それを自分の意見や考えを表現する素材として実際に使ってみなければ、知恵やスキルとしての確かな学力とはならない面がある。そこで授業を「一話完結」の形態とし、全159回の概要等を授業スケジュール表によって提示した上で、毎回の学習の中心となるテーマについて生徒に120字程度の論述を課し提出させている。

さらに本時と連動する形で、中間考査終了後の1回目の授業は図書室での調べ学習とし、学習内容の範囲内で自分の興味関心に基づいたテーマを設定して参考文献にあたり、レポートを書かせた。これは、授業とは別に学習内容を深化拡大させ、主体的で発展的な自学自習の機会となっている。

A-1 授業スケジュール表

2 実践内容

(1) 単元の目標

地中海世界については、まずエゲ文明がオリエント文明をギリシアに媒介したことやフェニキア人が海上貿易で活躍したことについて触れ、それらの影響の下にポリスを中心とするギリシア文明が形成されたことを把握させる。また、ギリシア文明はアレクサンドロスの遠征で西アジア一帯に伝えられるとともに、ローマ文明にも深い影響を与えたことを把握させる。

(2) 指導上の工夫点（視点）

①指導法や学力定着の工夫（本時の授業において）

導入として、授業のテーマを質問の形式で示すことにより、積極的に授業に臨む姿勢を持たせる。また、テーマに関わる教科書の記述を一人一文ずつ順番に音読させる。

授業の最後に、授業テーマの論述問題に取り組みせて提出させ、最も優れたものを、独自の視点や持ち味を活かした内容になっていることを重視して選び、次時の授業で紹介する。これは論理的な思考力や個性的な表現力を鍛えるとともに、他の生徒に読んでもらうことによって学習の成果を共有し、良好な授業環境作りに益するものとなる。

②指導法や学力定着のための工夫（次時の調べ学習）

授業で扱ったテーマ・時代・人物・文化等についての調べ学習を行うことによって、課題発見・課題解決的な学力を養うとともに、学習に対する意欲を高める。

③評価の工夫

定期考査1週間前までに試験範囲分の論述をまとめたプリントを全ての生徒に配付する。これは考査の論述問題対策になるとともに、他のクラスの生徒が書いた論述も読むことができるので好評である。

B-1 「本時の授業で配付したプリント」

B-2 「図書館での調べ学習提出用紙」

3 指導の実際

学習活動	生徒の活動	活動時間
導入 展開 結び	① 切り取り線以下に、120字のマス目がついたプリント（「接着剤Note」と称して、教科書や資料集にはない資料等を掲載したもの）を配付し、その授業（一話完結）の中心テーマを質問の形にまとめたT. Q.（テーマ・クエスチョン）を確認する。またT. A.（テーマ・アンサー）のヒントとして、資料集にある該当の資料のページと番号が板書によって示される。	チャイムの前
	② T. A.について書かれた教科書該当ページの文章を、「一人一文」で声を出して読み合わせる。	(3分)
	③ 様々な発問に答えつつ、板書をノートする。	(42分)
	④ ノートしたことや教科書・資料集を参考に、「T. A. 論述」を行う。時間内に書けなかった生徒は、休み時間等を利用して完成させ、原則その日の内に提出する。	(5分)

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果について

①毎回の授業のPDCA化

年度当初…シラバスに基づく授業スケジュール表により、各時代区分・地域区分の中に位置付けた形で毎回の授業内容の詳細を明示する。

毎回の授業…生徒と教師の双方が学習の全体像を意識しながら（PLAN）、毎回の授業をその中に有機的に位置付けて「一話完結」で実行する（DO）。

そのつど授業のテーマに基づいた論述を行い、間違いは指摘され優れたものは点数化されて評価に加味される（CHECK）。

それに励まされたり他の生徒からの刺激を受けて、継続的かつ拡大再生産的に次の学習に取り組む（ACTION）。

②定期的に実施されている生徒による授業評価では、極めて高い評価を得ている。

(2) 課題について

PDCAの4つの観点でいえば、評価（CHECK）の部分に課題があると思われる。高等学校での地理歴史科における学習活動の評価は、認知領域（語句の確認中心のペーパーテスト）に偏りがちである。だが、高度に知識化・情報化した社会においては、身につけた基本的な知識を活用し社会に役立たせる技能領域（身近な出来事やニュースを批判的・客観的に分析・判断できる等）や情意領域（様々な社会組織の一員として、他者と協働関係を結ぶことや良好なコミュニケーションを大切にしながら考え行動する等）における評価がより重視されなければならない。

今後は、そういった「今求められる真の学力」を適正に評価できるような工夫と実践を模索していきたい。